昆虫類　＜チョウ目　シジミチョウ科＞　　愛知県：絶滅危惧ＩＡ　（国：絶滅危惧ＩＡ類）
INSECTA　＜LEPIDOPTERA　LYCAENIDAE＞　　AICHI：CR　（JAPAN：CR）

ゴマシジミ　*Maculinea teleius kazamoto* (H.Druce)

【選定理由】

最近、本種は激減してしまい、2001 年以来（高橋ほか, 2001）記録がない。近い将来、愛知県では絶滅が危惧される 1 種と考えられている。全国的にも個体数が減ってきているため保護の必要性がある。

豊田市(旧旭町), 2000 年 9 月 9 日, 高橋匡司 撮影

【形　態】

本種は、地理的ならびに個体的な変異が著しく、日本産シジミチョウ科の中でも最も変化に富むチョウの 1 種である。前翅長は 21mm 程度で、シジミチョウとしては大型である。

翅表面は黒縁、黒斑を有する青藍色から全面暗褐色のものまで変異が大きいチョウである。翅形や翅斑などの外見のみによる♂♀の鑑別は、難しく熟練を要するが、腹端および前脚の構造を調べれば容易に区別される。

【分布の概要】

【県内の分布】

分布は、局地的である。かつては、豊田市（旧藤岡町、旧小原村、旧足助町、旧旭町、旧稲武町）、設楽町（旧設楽町）、新城市（旧作手村）などで記録されたが、近年は記録がないまま推移している。

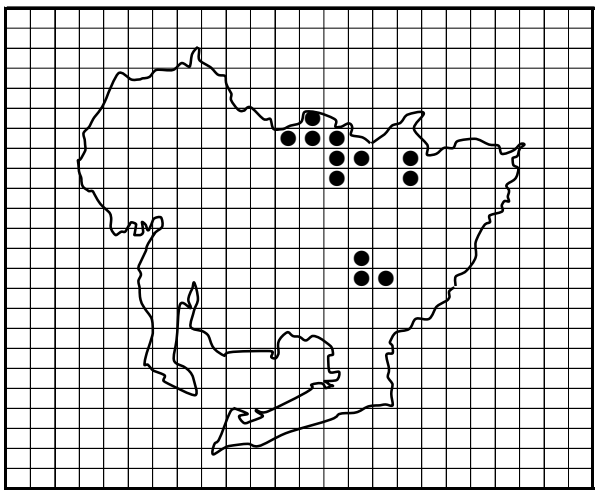
【国内の分布】

北海道、本州、九州に分布する。青森県や山梨県には、分布も広く産地も多いが、本県の近隣地域では、山間地帯に発生地があるも、その多くは局所的である。最近、岐阜県東濃地区も個体数が激減し、保全のための基礎調査が実施されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部よりヨーロッパにわたってユーラシア大陸の北部まで分布が広がっている。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

日当たりの良い湿地状草地や山間部の日照を確保するために造られた草地が生息地であり、そこには幼虫の初期の食餌植物のワレモコウが自生し、後期の食餌となるクシケアリの仲間が生息する。

年 1 回の発生で、8 月中～下旬頃が最盛期である。母チョウは、ワレモコウの花穂に産卵、幼虫はワレモコウの花に食い入り成長し、4 齢になると地上に降りてクシケアリの仲間に巣の中に運ばれる。幼虫はアリの卵や幼虫を食べて成長する。幼虫で越冬する。旧藤岡町・旧小原村・旧旭町産は、岐阜県東濃地方の産地圏と同一のもので翅表は青色、旧稲武町・設楽町産は長野県下伊那産に近く青藍色、旧作手村産は孤立性で青白色とそれぞれが異なった色調を示す（高橋, 1984）。

【現在の生息状況／減少の要因】

1980 年代前半までは、湿性草原に相当数生息していたが、その後激減し、1999 年に旭町で数頭が確認されたのが記録（高橋ほか, 2001）の最後である。湿性草原の遷移による草木の繁茂・管理放棄や機械による徹底した草刈りなど管理形態の変化による生息環境の悪化のために絶滅の危機に追いやられたものと思われる。一方、ワレモコウは復活し、農薬の過度な使用は減り、各種のチョウが生息しはじめるなど、外観的には生息できそうな環境に回復したように見えるが、本種の復活の兆しはない。

【保全上の留意点】

本種は、湿性草原や日当たりのよい草原環境に依存し、特異な生活様式を有している。近年は急激に個体数を減らしているので、先ずは、食餌植物であるワレモコウの生育とクシケアリの仲間が生息できる環境の維持・回復が必要不可欠である。なお、過度の採集は避けたいものである。

【特記事項】

「ゴマシジミ関東・中部亜種」として種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されている。

【引用文献】

高橋 昭, 1984. チョウ類. 愛知の動物: 126. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 26-27, 257. (財)旭高原自然活用村協会.

【関連文献】

白水 隆, 2006. ゴマシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 171. 学習研究社, 東京.

巣瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第 5 集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002 年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

（2009 年版を一部修正）